

鷗外漁史とは誰ぞ

森鷗外

福岡日日新聞の主筆猪股いのまたためじ為治君は予が親戚しんせきの郷人きやうじん

である。予が九州に来てから、主筆はわざわざわがりよくう我旅寓

を訪とわれたので、予は共に世事を談じ、また間々ま文学

の事に及んだこともあつた。主筆は多く欧羅巴ヨオロッパの文章

を読んで居て、地方の新聞記者中には実に珍しいとい

わねばならぬ人である。昨年彼新聞かのが六千号を刊する

に至つたとき、主筆が我文を請われて、予は交誼こうぎじよう上こ

れに応ぜねばならぬことになつたので、乃すなわち我をし

て九州の富人たらしめばという一篇を草して贈つた。

その時新聞社の一記者は我文に書後のようなものを添

えて読者に紹介せられた。その語中にこの森というも

のは鷗外おうがいぎよし漁史だとことわつてあつた。予は当時これを
読んで不思議な感を作なした。この鷗外漁史と云とう称となえ
は、予の久しく自ら署したことのないところのもので
ある。これを聞けば、ほとんど別人の名を聞くが如く、
しかもその別人は同世の人の方ではないでなくて、却かえつて
隔世の人の方である。明治の時代中ある短日月の間、
文章と云えば、作に露伴紅葉四迷こうせん篁村緑雨美妙等が
あつて、評しに逍遙しょうよう鷗外があるなどと云つたことがある。
これは筆を執る人の間で唱えたのであるが、世間のも
のもそれに応じて、漫みだりに予を諸才子の中に算えるよ
うになつて居た。姑しばらく今数えた人の上だけを言つて

見ように、いずれも皆文を以て業として居る人々であつて、僅わずかに四迷が官吏になつて居り、逍遙が学校の教員をして居る位が格外であつた。独り予は医者で、しかも軍医である。そこで世間で我虚名を伝うると与ともに、門外の見は作と評との別をさえ模糊もごたらしめて、他かれは小説家だということになつた。何故に予は小説家であるか。予が書いたものの中に小説というようなもの、僅に四つ程あつて、それが皆極ごくの短篇で、三四枚のものから二十枚許ほかりのものに過ぎない。予がこれに費した時間も、前後通算して一週間にだに足るまい。予がもし小説家ならば、天下は小説家の多きに勝たえぬ

であろう。かように一面には当時の所謂いわゆる文壇が、予に
実に副かなわざる名声を与えて、見当違の幸福を強いたと
同時に、一面には予が医学を以て相交わる人は、他はあれ
小説家だから与ともに医学を談ずるには足らないと云い、
予が官職を以て相對する人は、他は小説家だから重事
を托たくするには足らないと云つて、暗々裡あんあんりに我進歩を
礙さまたげ、我成功を挫くじいたことは幾何いくばくということを知ら
ない。予は実に副わざる名声を博して幸福とするもの
ではない。予は一片誠実の心を以て學問に従事し、官
事おうしやうに鞅掌おつしやうして居ながら、その好意と悪意とを問わず、
人の我真面目しんめんもくを認めてくれないのを見るごとに、独り

自ら悲しむことを禁ずることを得なかつたのである。それ故に予は次第に名を避くるといふことを勉めるようになった。予が久しく鷗外漁史という文字を署したことがなくて、福岡日日新聞社員にこれを拈出せられて一驚を喫したのもこれがためである。然るに昨年の暮に迨んで、一社員はまた予をおとずれて、この新年の新刊のために何か書けと曰うた。その時の話に、敢て注文するではないが、今の文壇の評を書いてくれたなら、最も嬉しかろうと云うことであつた。何か書けが既に重荷であるに、文壇の事を書けはいよいよむずかしい。新聞に従事して居る程の人は固より知つて

居られるであろうが、今の分業の世の中では、批評と
いうものは一の職業であつて、能評の功を成就せんと
欲するには、始終その所評の境界に接して居ねばなら
ぬ、否身をその境界に置いて居ねばならぬものだ。文
壇とは何であるか。今国内に現行している文章の作者
がこれを形かたちづくつて居るのである。予の居る所の地
は、縦令予たといが同情を九州に寄することがいかに深から
んも、西僻せいへきの陬邑すうゆうには違あるまい。予は僅に二三の京
阪の新聞紙を読んで、国の中枢しゅうちゅうの崇重しゅうじゆうしもてはやす
所の文章の何人の手に成るかを窺うかがい知るに過ぎぬの
で、譬たとえば簾れんを隔へてて美人を見るが如くである。新聞

紙の伝うる所に依れば、先ず博文館の太陽が中天に君臨して、ちよぎゆう 樗牛が海内文学の柄を把とつて居る。文士の恒つねの言ことに、樗牛は我に問題を与うるものだと云つて、嘖さか々乎さいとして称して已やまないらしい。樗牛また矜きやう高こう自ら持して、我が説く所は美学上の創見なりなどと曰つて居る。さてその前後左右に綺羅星きらぼしの如くに居並んで居る人々は、遠目の事ゆえ善くは見えぬが、春陽堂の新小説の宙外、日就社の読売新聞の抱月などという際立つた性格のある頭が、ひじ 肱を張つて控えて居るだけには明かに見える。此等は随分博文館の天下をも争ついかねぬ面魂つらだましであるから、樗牛も油断することは出来

まい。その外帝国文学という方面には、堂々たる東京帝国大学の威を借つて、血氣壯な若武者達が、その数幾千万ということを知らず、入り代り立ち代り、壇に登つて伎ぎを演じて居るようだ。これが即ち文壇だ。この文壇の人々と予とは、あるいは全く接接触点を闕かいでいる、あるいは些いささかの触接点があるとしても、ただ行路の人が彼往き我來る間に、忽たちまち相顧みてまた忽ち相忘るるが如きに過ぎない。我は彼に求むる所がなく、彼もまた我に求むる所がない。縦たといまた樗牛と予との如く、ある關係が有つても、それは言うに足らぬ事であつて、今これを人に告ぐる必要を見ない。かよ

うに今の文壇の思想の圏外に予は立っていて、予の思想の圏外に今の文壇は立っている。福岡日日新聞が予に文壇の評を書けと曰うのは、我筆舌に課するに我思想の圏外の事を以てするのだ。予には文壇の評と云うものの書けぬことは、これで明あきらかであろう。そこで予は切角の請ながら、この事をば念頭に留とどめなかつた。然るに主筆はまた突如として来られて、是非書けと促される。その情極きわめて慇懃いんぎんである。好よし好よし。然らば主筆のために強いて書こう。同じく文壇の評ではあるが、これは過去の文壇の評で、しかもその過去の文壇の一分子たりし鷗外漁史の事である。原もと主筆が予に

文壇の評を求められるのは、予がかつて鷗外の名を以て文学の事を談じたという宿因あるが故だ。ここに書くところは即ち予の懺悔ざんげで、彼宿因を了する所以ゆえんだ。人は社会を成す動物だ。樵夫きしりは樵夫と相交つて相語る。漁夫は漁夫と相交つて相語る。予は読書癖があるので、文を好む友を獲て共に語るのを樂たのしみにして居た。然るに国民之友の主筆徳富猪一郎君が予の語る所を公衆に紹介しようと思ひ立たれて、丁度今猪股君が予に要求せられる通りに要求せられた。これが予が個人と語ることから、公衆と語ることに転じた始で、所謂鷗外漁史はここに生れた。それから東京の新聞雑誌が、彼も

此も予を延ひいて語らしめた。予は個人に対しても、時に応じ人を得るときは、頗すこぶる饒舌しやべる性たちであるが、當時予はまた公衆に対して饒舌しやべつた。新聞雑誌は初は予を強要して語らしめたが、後にはそう大言壮語せられては困るとか云つて、予の饒舌しやべるに辟易へきえきした。昔者道士むかしはがあつて、咒じゆを称となえ鬼を役して灑掃さいそうせしめたそうだ。その弟子が窃ぬすみ聴いてその咒じゆを記おぼえて、道士の留守を伺うかこうて鬼を喚よんだ。鬼は現まわれて水を灑まき始めた。而しかるに弟子は召よぶを知つて逐おうを知らぬので、満屋皆水なるに至つて周章措おく所を知らなかつたといふことがある。当時の新聞雑誌はこの弟子であつた。予はこ

れを語るにつけても、主筆猪股君がこの原稿に接して、早く既に同じ周章をせねば好いがと懸念する。予の公衆に語る習はこれにも屈せず、予は終つひに人の己を席に延くを待たぬようになった。自ら席を設けて公衆に語るようになった。柵草紙しがらみそうしと云つたのがその席だ。この柵草紙の盛時が、即ち鷗外という名の、毀誉褒貶きよほうへんの旋風つむじかぜに翻弄ほんろうせられて、予に実かなに副いつわりわざる偽いつわりの幸福を贈り、予に学界官途の不信任を与えた時である。その頃露伴が予に謂いうには、君は好んで人と議論を闘わして、ほとんど百戦百勝という有様であるが、善く涸おほぐものは水に溺おほれ、善く騎のるものは馬より墜おつる訣わけで、

早晩いつかの大議論家が出て、君をして一敗地に塗れまみしむるであろうと云った。この言はある意味より見れば、確に當った、否当り過ぎた位だ。時代は啻ただに一つの大議論家を出したのみではなくて、ほとんど無数の大議論家を出して止むや時がない。即ち新文学士の諸先生がそれである。試みに帝大文学の初の数十冊を始として、同時に出た博文館の太陽以下の諸雑誌、東京の諸新聞を見たならば、鷗外と云う名に幾条の箭やが中あたっているかが知れるだろう。鷗外という名はこの乱軍の間に聞こえなくなつた。鷗外漁史はここに死んだ。読者は新年の初刊を看みてここに至る時、縁起が悪いと云うかも

知れない。しかし初春の狂言には曾我そがを演ずるを吉例としてある。曾我は敵討かたきうちで、敵を討てば人死のあることを免れない。況いわんや鷗外漁史は一の抽象人物で、その死んだのは、児童の玩もてあそんでいた泥つちにんぎよう 孩こわが毀れたに殊ならぬのだ。予は人の葬を送つて墓穴に臨んだ時、遺族の少年男女の優しい手が、淨きよい赭土あかつちをぼろぼろと穴の中に翻こぼすのを見て、地下の客がいかにも軟やわらかな暖な感を作すであらうと思つたことがある。鷗外の墓穴には沙礫されき乱下したのを見る外、ほとんど軟い土を投じたのを見なかつた。ただ一ついくらか手軟だと思つたのは、ほととぎすの記者が、鷗外も最早今まで

我等に与えた程のものをば与うることを得ぬであろうと云つたくらいなものだ。ついでだから話すが、今の文壇というものは、鷗外陣亡うちじにの後に立つたものであつて、前から名の聞こえて居た人の、猶なおその間に雑まじつて活動しているのは、ほとんど彼はいかいほととぎすの子規のみであろう。ある人がかつて俳諧はいかいは普遍の徳があるとか云つたが、子規の一派の永く活動しているのは、この普遍の徳にでも基もとづいて居るものであろう。予が主筆のために説かんと約した鷗外漁史こじの事は此に終る。しかし予は主筆に、予をして猶暫しばらく語らしめん事を願う。想うにこの文を読むものは予むかに對つて、汝は汝の分身

たる鷗外の死んだのを見て、奈何いかにの観なを作すかと問う
であろう。予はただ笑止に思うに過ぎぬ。予はただこ
こに一炷いっしゆの香ひねを拈ひねつてこれを吊ひするに過ぎぬ。予にし
てもし彼の偽の幸福のために、別方面の種々の事業の
阻礙そがいをさえ忘るるものであつたなら、予は我分身ともしと与
に情死したであろう。そうして今の読者に語るものは
幽霊であろう。幽霊は怨めしいと云つて出るものには
極きまつて居る。もし東京に残つて居る鷗外の昔の敵が
この文を読んだなら、彼等はあるいは予を以て幽霊と
なし、我言を以て怨しいという声となすかも知れない。
しかしそれは推測を誤つて居る。敵が鷗外と云う名を

標的まるとにして矢を放つ最中に、予は鷗外という名を署する事を廃めた。矢は蝟毛いせもうの如く的に立つても、予は痛いとも思わなかつた。人が鷗外という影を捉えて騒いだ時も、その騒ぎの止んだ後も、形は故もとの如くで、我は故の我である。啻ただに故の我なるのみでは無い、予はその後も学んでいて、その進歩は破鼈はべつの行くが如きながらも、一日を過ぎれば一日の長を得て居る。予は私ひそかに信ずる。今この陬邑すうゆうに在つて予を見るものは、必ずや怨懟えんたい不平の音の我口から出ぬを知るであらう。予は心身共に健で、この新年の如く、多少の閑情雅趣を占め得たことは、かつて書生たり留学生たりし時代

より以後には、ほとんど無い。我学友はあるいは台湾に往き、あるいは欧羅巴に遊ぶ途次、わざわざ門司から舟を下りて予を訪うてくれる。中にはまた酔興にも東京から来て、ここに泊まって居て共に学ぶものさえある。我官僚は初の間は虚名の先ず伝つたために、あるいは小説家を以て予を待ったこともあったが、今は漸くその非を悟つてくれたらしい。予と相交り相語る人は少いながら、一入親しい。予はめさまし草を以て、相更らず公衆あいかわに対しても語つて居る。折々はまた名を署せず、もしくは人の知らぬ名を署して新聞紙を借ることもある。今予に耳を借す公衆は、不思議に

も柵草紙の時代に比して大差はない。予は始から多く聴者ききやてを持つては居なかつた。ただ昔と今との相違は文壇の外に居るので、新聞紙で名を弄ばれる憂が少いだけだ。莊子そうしに虚舟の譬たとへがある。今の予は何を言つても、文壇の地位を争うものでないから、誰も怒るものは無い。彼虚舟と同じである。さればと云つて、読者がもし予を以て文壇に対して耳を掩おほい目を閉じているものとなしたならば、それは大に錯あやまつて居るのであらう。予は新聞雑誌も読む。新刊書も読む。読んで独り自ら評価して居る。ただこの評価は思想を同じゆうして居ないものの評価で、天晴批評あっぱれと称して打出して

言挙ことあげすべきものでないばかりだ。しかし筆の走りついでだから、もう一度主筆に追願おいねがいをして、少しくこの門外漢の評価の一端を暴露しようか。明治の聖代になつてから以還このかた、分明に前人の迹あとを踏まない文章が出たということは、後世に至つても争うものはあるまい。露伴の如きが、その作者の一人であるということも、また後人が認めるであろう。予はこれを明言すると同時に、予が恰あたかもこの時に逢うて、此かくの如き人に交ることを得た幸福を喜ぶことを明言することを辞せない。また前に挙げた紅葉等の諸家と俳諧での子規との如きは、才の長短こそあれ、その作の中には予の敬服する

所のものがある。次にここに補つて置きたいのは、翻訳のみに従事していた思軒と、後おくれて製作を出した魯庵ろあんとだ。漢詩和歌の擬古うごの裡うちに新機軸を出したものは姑しほりく言わぬ。凡おおよそ此等の人々は、皆多少今の文壇の創建に先だつて、生埋の運命に迫られたものだ。それは丁度雑りものの賤金属せんきんぞくたる鷗外が鑄潰いつぶされたと同じ時であつた。さて今の文壇になつてからは、宙外の如き抱月の如き鏡花の如き、予はただその作のある段に多少の才思があるのを認めただばかりで、過言ながらほとんど一の完璧かんぺきをも見ない。新文学士の作に至つては、またまた過言ながら一の局部の妙をだに認めたこ

とが無い。予は是こゝにおいて将まさに自ら予が我分身の鷗外と共に死んで、新しい時代の新しい文学を味わうことを得ないようになったかを疑わんとするに至った。然るにここに幸なるは、一事の我趣味の猶依然たることを証するに足るものがある。それは何であるか。予は我読書癖の旧に依るがために、欧羅巴の新しい作と評とを読んで居る。予は近くは独逸ドイツのゲルハルト・ハウプトマンの沈鐘を読んだ。そして予はこの好処の我を動かすことが、昔前人の好著を読んだ時と違わぬことを知った。鷗外は殺されても、予は決して死んでは居ない。予は敢あえて言う。希臘語ギリシヤに「エピゴノイ」という

ことがある。猶此に末流と云うがごとしだ。新文学士諸家も、これと袂たもとを聯つらねて文壇に立っている宙外等の諸家も、「エピゴノイ」たることを免れない。今の文壇は露伴等の時代に比すれば、末流時代の文壇だといふのだ。予はこの文の局を結ぶに當つて、今の文壇の諸家が地方新聞を読むや否やは知らぬながら、はるか遙に諸家に寄語する。諸家は予などと違つて、皆春秋に富んで居られるではないか。今より後に、諸家はどうぞ奮つて、予が如き門外漢までを、大に動かすような作と評とを出して下さい。そうして予をしてかつて無礼にも諸君に末流の称を献じた失言を謝せしめて下さい。

鷗外は甘んじて死んだ。予は決して鷗外の敵たる故を以て諸君を嫉むものではない。明治三十三年一月於小倉稿。

(明治三十三年一月)

底本：「歴史其儘と歴史離れ 森鷗外全集14」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年8月22日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版森鷗外全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～9月

入力：大田一

校正：noriko saito

2005年8月19日作成

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。